【論　文　提　出　者】　社会文化科学研究科　文化学専攻　欧米文化学領域
石井　容子

【論　　文　　題　　目】
熊本洋學校教師 Capt.L.L.Janes 研究
－足跡と功績－

【授与する学位の種類】　博士（文学）

【論文審査の結果の要旨】

石井氏の学位論文「熊本洋學校教師 Capt. L.L. Janes 研究――足跡と功績――」は、1871 年（明治 4 年）熊本洋學校教師としてアメリカから赴任してきたジェインズ（Leroy Lansing Janes 1837-1909）が、教育者として、また宗教家あるいは熊本の近代化の指導者として歩んだ足跡を、従来の資料及び新たな資料の調査をもとに明らかにし、その功績を再評価することを目的としている。

論文は序章と結びの章を含めて 9 章からなっており、ジェインズの足跡をたどるべく時間的な経緯に沿って章立てがなされ､各章がさらに細かい節に分けられ､時間的な流れを大きな軸にしながらも、教育内容、知人、友人との関係、また家族の事情等、横の軸で記述されるべき部分をその中に分かりやすく含める形で構成されている（序章：英学教師ジェインズ、第 1 章：アメリカから日本へ、第 2 章：熊本洋學校赴任、第 3 章：官立大坂英語學校赴任、第 4 章：帰米、第 5 章：第三高等中學校赴任、第 6 章：鹿児島縣尋常中學造士館赴任及び第三高等學校再赴任、第 7 章：アメリカでの晩年、終章）。各章で、先行研究ですでに使用あるいは言及されている資料を再検討するとともに（そこで見落とされている事実の指摘、すでに訳出されている英語文献の読み違いの指摘及び修正、他）、新たな資料に基づいた多くの事実・情報を提示し、これまでなかったジェインズの全体像を見事に纏め上げ、提示している。

序章で先行研究についての検討がなされ、第 1 章で故郷タスカラワスにおけるジェインズを取り巻く状況、第 2 章で、受け入れ当時の肥後熊本藩の実情、到着後の教師館までのルート、ジェインズの祝辞演説、授業での使用テキスト、彼のキリスト教教育、家族の生活環境、他、第 3 章で、当校での勤務履歴、元洋學校生との交流、彼らの伝道活動、同志社との関係、他、第 4 章ではロイスの供述書を中心に、帰米までの経過、他、第 5 章で、当校での勤務履歴、雇用契約書、ジェインズ一家の生活環境、他、第 6 章で、当校での勤務履歴、ジェインズの書簡、先行研究の修正、他、第 7 章で、元妻フロラの書簡、晩年近くにジェインズが書き遺した書類、元洋學校生たちとの面会、他、終章で、前章までの資料調査・研究から浮かんでくるジェインズ像についての筆者の見解、まだ入手できていない国内外の資料調査についての今後の課題が述べられている。各章での記述がこれまでのジェインズ研究を大きく推進させるものであるが、特に、これまで未発掘だったジェインズ作成のいくつかの演説原稿文から読み取れる彼の教育理念や宗教観などについての記述や、熊本洋學校での授業で用いられたテキストの詳細な調査とその整理、ジェインズ本人及び周囲の関係者たちとの間でやり取りされた多くの英語書簡から見えてくる事実、また同じ時期に来日していた他のアメリカ宣教師たちとの確執などの記述は、教育者としてのジェインズにとどまらず、彼の人生観、道徳観、宗教観までもが浮き彫りにされ、彼の全体像に深く迫っている。

このように、熊本における、さらには日本におけるジェインズの足跡と功績を可能な限り網羅的に

まとめた本論文は、これからのジェインズ研究の拠り所ともなるもので、彼についての今後の研究、ひいては熊本の文化研究に大いに貢献するものであり、質、量ともに学位論文として充分なレベルに達している。

以上の所見により、本論文が学位論文として適格であると判断する。

【最終試験の結果の要旨】

平成 23 年 12 月 20 日（火）16 時 30 分より、文学部欧米言語文学コース研究室 II において、審査員 5 名の参加のもと、石井容子氏の学位論文審査最終試験を行った。まず、石井氏が論文の概要を口頭で述べ、引き続き質疑応答を行った。論文の内容、および口述試問の応答ともに適切であり、申請論文が学位を授与するに足るものであることを審査委員全員が了解した。

よって、本委員会は、石井氏の学位論文審査最終試験を合格であると判断する。

【審査委員会】

主査　隈元　貞広
委員　大野　龍浩
委員　福澤　清
委員　三瓶　弘喜
委員　合田　美子